共同研究

文末表現－依頼要求表現と丁寧度の要因－

中　島　悦　子

1　はじめに

話しことばにおいて話し手が相手との間にコミュニケーションを円滑に保たせようとする場合、相手に対してできるだけ押しつけがましくないように婉曲的で丁寧な表現を選択しようとする配慮が無意識的にせよ或は意識的にせよ働く。このような話し手の相手に対するさまざまな配慮が言語形式に反映される。話し手は断定的で直接的な言語形式よりも断定を回避する間接的な言語形式を使用することによって相手に対する丁寧さを表そうとする。日本語の話しことばにおいてはこのような断定を回避する間接的な表現は文末の言語形式によって表されることが多い。例えば話し手が相手に依頼を求める場合、「ちょっとお金を貸して」というような動詞のテ形終止による直接的な文末の言語形式より、「少しお金を貸していただけないでしょうか」というような「テ形＋いただけないでしょうか」という断定を回避する間接的な文末形式の方がより丁寧な表現として使われる。つまり文末の言語形式における丁寧度の強弱は間接性の度合に左右されると言える。

前稿（1994）では職場における女性の話しことばを文末の言語形式－依頼要求表現や疑問表現等－に焦点をしぼり、その丁寧度の要因を場面差や世代差との関連で調査分析した。調査結果は、日本語の話しことばにおける要求や疑問の表現の丁寧度は必ずしも場面や世代に左右されるものではないという事実であった。いうまでもなく話しことばの丁寧度の要因は場面や世代によるだけではなく、話し手と相手との性関係、年齢や職場の上下関係、親疎関係、付き合い年関係、会話量関係、接触量関係等のさまざまな要因に左右されることが多い。

本稿は前稿において残された課題、即ち日本語の文末の言語形式のうち依頼要求表現に焦点を絞り、その丁寧度の要因を話し手と聞き手との関係、即ち性関係や年齢関係、親疎関係、付き合い年関係、接触量関係等との関連において調査分析する。本調査の資料は前稿と同じく「職場における女性の話しことば」（1994）における30代の女性高校教員［HI］の録音データを使用した。

個々の分析に入る前に、前回分析に使用したデータと今回使用したデータについてすこし補足しておく。前回のデータベースにはインフォマントの発話と場面のみの情報しか入力されていなかったため、細かな分析ができなかった。今回のデータベースにはインフォマントとそれ以外の発話者との性関係、年齢・職場の上下関係、親疎関係等の全ての情報が入力済みであるため、更に詳しい分析が可能となっている。ただし前回のデータの［場面］については、今回は［場面１］（朝、会議、休憩）と［場面２］（打合せ、小会議、休憩時雑談）とに細分されており、更に［場面１］の（朝）には（打合せ）や（休憩時雑談）とが入りまじっている。そこで本稿で扱う［場面］については、前回考察した［場面１］の方ではなく、［場面２］の［打合せ（打）、小会議（会）、休憩時雑談（休）］の方で処理する。

データに登場するインフォマントである（HI：高校教員　30代　女）以外の発話者を挙げると次のようになる。

＊MY：（高校生徒　10代　男）　＊FK：（高校教員　50代　男）
＊OD：（高校教員　50代　男）　＊ME：（元高校教員　60代　男）
＊NE：（高校教員　30代　男）

なお前稿でも挙げた依頼要求形式のタイプを丁寧度の順位で示しておく。

1　依頼要求形式

(1)　動詞命令形　　はっきり言え。
(2)　動詞連用形＋な　　はっきり言いな。
(3)　動詞基本形　　はっきり言う。

(4)	～なさい。～なさいね。	はっきり言いなさいね。
(5)	～て。～てね	はっきり言ってね。
(6)	～てくれ	はっきり言ってくれ。
(7)	～てください	はっきり言ってください。
(8)	～ていただけないでしょうか。	はっきり言っていただけないでしょうか。
(9)	～ていただければね	はっきり言っていただければね。
(10)	～ていただければと思って	はっきり言っていただければと思って。
(11)	～ていただければいいんですけど	はっきり言っていただければいいんですけど。
(12)	～ていただけるとありがたいと思います	はっきり言っていただけるとありがたいと思います。
(13)	もしよろしかったら～	もしよろしかったら～

上記について簡単に説明すると、丁寧度の強弱は間接性が最も低い(1)のレベルが最も丁寧度が弱く、間接性が最も高い(13)のレベルが最も丁寧度が強くなる。

(1)の動詞の命令形や(2)の動詞の連用形＋「な」、(3)の動詞の基本形、(4)の動詞の連用形＋「なさい（ね）」、(5)の動詞のテ形終止、(6) (7)の動詞のテ形＋「くれる」の命令形のタイプまでは直接相手に依頼要求をする時の表現である。(1)から(4)のタイプまでは依頼というよりむしろ命令に近い表現なので丁寧度は低い。間接性の度合の低さから(1)から(7)までのタイプを直接依頼要求形式と読んでおく。(8)から(13)までのタイプは相手がその動作をしてくれるように間接的に頼みこむ表現で、間接依頼要求形式と呼ぶことにする。断定的な言い方を避けているため丁寧度は高くなる。間接依頼要求形式は構文的には、1　動詞のテ形＋「もらう」の受け手尊敬語「いただく」の条件形、

2　否定形「ない」、「でしょう」、疑問の「か」の付加、3　評価の「いい」「ありがたい」の付加、4　思考を表す「思います」付加、5　条件「たら」止めによる前置き等から成り立ち、これらいずれかの形式を加えることによって断定を回避する間接的な表現となる。

2　調査事例

＜表１＞は依頼要求形式の発話者別の使用数である。

＜表１＞

	HI：女			*FK：男			*OD：男			*NB：男			*MB：男			
	休	打	会	休	打	会	休	打	会	休	打	会	休	打	会	計
1　動詞命令形																
2　動詞連用形＋な		1														1
3　動詞基本形		1														1
4　～なさい（ね）		1														1
5　～て（ね）	5			1					1				1			8
6　～てくれ																0
7　～てください	1	1								1						3
8　～ていただけないでしょうか																0
9　～ていただければね																0
10　～ていただければと思って																0
11　～ていただければいいんですけど																0
12　～ていただけるとありがたいんですけど																0
13　もしよろしかったら																0

＜表１＞によると、丁寧度の高い(8)から(13)までの間接依頼要求形式については男女とも使用者はゼロである。従来話しことばにおいては、このような断定を回避する間接依頼要求形式は丁寧度が高いため女性に好まれる傾向があると考えられているが、この［HI］の資料について言えば、現実にはフォーマルな［小会議］においてすら女性の使用は皆無であった。

これに対して直接依頼要求形式は、特に［～て］形式の使用が男女ともに

多い。(1)〜(7)までのタイプの使用数及び使用率を男女別に挙げると、次のようになる。

(1)の動詞命令形の使用は男女ともゼロである。(2)の動詞連用形＋「な」のタイプは女性に1例、総発話数838に対する比率は0.12%である。(3)の動詞基本形は女性に1例、対総発話数比は0.12%である。(4)の「〜なさいね」は女性に1例、対総発話数比は0.12%である。(5)の「〜て」は女性4例、男性3例計7例、対総発話数比は0.84%、「〜てね」が女性1例、対総発話数比は0.12%である。(7)の「〜てください」は女性2例、男性1例計3例、対総発話数比は0.34%である。以下に一つ一つ事例を挙げて（番号は文番号）説明する。

2・1　「動詞連用形＋な」「動詞の基本形」「〜なさいね」［打合せ］

（女　計3例）

（3）　はっきりいいな、あんた、はっきり。［HI］

（5）　はっきり、はっきり思っていることを言う。［同］

（34）　思っていることねー、ゆっくりでいいから、（間）はっきりと言いなさいね。［同］

3例ともインフォマント［HI］の朝の［打合せ］の場面である。女教師の男生徒［＊MY］に対する発話であるから、年齢関係は［下下］、相手の性関係は［異性］、付き合い年関係は［1年］、接触量・会話量は［多］、親疎関係は［普通］である。「動詞連用形＋な」「動詞基本形」「〜なさいね」という形式は相手に直接応答を強制する命令に近い表現であるから、丁寧度は最も低く、一般的には男性的表現として捉えられ、女性には避けられる傾向がある。しかしながら3例とも女性に使われ、男性には使われていない。女性は男性よりより丁寧な形式を好むという一般的な認識はここではあてはまらない。また［打合せ］の場面に使われているところを見ると、フォーマルな場面には丁寧度の低い形式の使用は避けられるという一般的なことばの

規範もない。更に異性に対しては丁寧なことばが使われるという認識も見られない。話し手である教員［HI］が丁寧度の最も低い形式を選んだのは、相手である生徒が自分より立場や年齢が下位にあるからであろう。［HI］にとっての丁寧度を選ぶ要因は相手との関係において年齢や立場の上下関係が最優先されている。丁寧度の要因はこのように話し手が相手との関係においてどれを最優先するかという意識によって異なる。この場合、話し手［HI］が丁寧度を選択した要因は、場面や相手の属性ではなく、相手との年齢関係や立場の上下関係にあると言ってよい。

2・2　「～て」［休憩時雑談］（女：4例）（男：2例）
　　［小会議］（男：1例）
　　「～てね」［休憩時雑談］（女：1例）

(47)　待ってー。［HI］［休］
(48)　待って、ここに2枚でしょ。［HI］［休］
(63)　ちょっと待って。［HI］［休］
(160)　ちょっと許して。［HI］［休］

4例ともインフォマント［HI］の発話であり、相手［＊FK］も同じである。場面は［休憩時雑談］、発話者と相手との性関係は［異性］、年齢関係は［上上］、職場関係は［同僚］、入社年関係は［先輩］、付き合い年関係は［2～4年］、接触量・会話量は［多多］、親疎関係は［親親］である。4例とも相手の年齢が話し手より上であり、入社年関係が［先輩］であるにもかかわらず、丁寧度の低い「～て」形式が使用されている。この場合の話し手［HI］のことばの丁寧度の選択基準には、相手が異性かどうかという性関係、年齢の上下関係、先輩か後輩かという入社年関係は影響を与えていない。話し手［HI］にとって相手の［＊FK］は日常的によく接し、よく話す親しい同僚である。［HI］にとって丁寧度の高い表現を使うことはむしろ相手との間に距離を作ってしまい、親しさを損なうという意識の方が強い。丁寧度の

低い形式を使用することによって相手との距離を縮め、親しい関係を保とうとする。とするとこの場合の丁寧度は職場関係［同僚］や接触量・会話量［多多］、親疎関係［親親］が要因となっているのである。

(76) 待ってね。［HI］［休］

女性専用とされるテ形に「ね」の伴う「～てね」形式の使用は女性に1例で男性には見られなかったが、この例のみでは使用が女性に限定されるとは言い切れない。場面は朝の［休憩時雑談］、相手は［＊FK］である。話し手［HI］と相手［＊FK］との性関係は［異性］、年齢関係は［上上］、職場関係は［同僚］、入社年関係は［先輩］、付き合い年関係は［2～4年］、接触量・会話量［多多］、親疎関係は［親親］である。この場合も丁寧度は性関係や年齢関係、入社年関係には左右されておらず、職場関係、接触量、会話量、親疎関係に影響されている。

(69) 交換して。［＊FK］［休］

場面は［休憩時雑談］、話し手［＊FK］は50代の男性教師であり、対する相手は30代の女性教師［HI］である。話し手にとっては相手は年齢も下であり、後輩にあたり、しかも親しい同僚である。丁寧度の低いくだけた表現を使うのは当然であろう。この場合の話し手と相手との性関係は［異性］、年齢関係は［下下］、職場関係は［同僚］、入社年関係は［後輩］、付き合い年関係は［2～4年］、接触量・会話量は［多多］、親疎関係は［親親］である。この例において話し手が丁寧度を選択した要因は性関係を除くすべての関係即ち、年齢関係、職場関係、入社年関係、接触量・会話量、親疎関係等である。

(638) ちょっとだけ顔をのぞいて。［＊ME］［休］

場面は［休憩時雑談］、発話者は60代の元教員［＊ME］である。相手は［HI］であるから、性関係は［異性］、年齢関係は［下下］、職場関係は

［元同僚］、入社年関係は［後輩］、付き合い年関係は［5～9年］、接触量・会話量は［多］、親疎関係は［親］である。［＊ME］と［HI］の接触量や会話量はあまり多くない。親疎関係も極めて親しいという関係ではない。にもかかわらず丁寧度の低い形式を使用しているのは、60代の［＊ME］にとって発話の相手は、年齢が自分よりはるかに下であるという年齢関係、また後輩であるという入社年関係が心理的に意識されているからであろう。この場合丁寧度の要因には話し手と相手との性関係や接触量・会話量、親疎関係等は関与していない。

(360) じゃあ、とにかく、40って直して。［＊OD］［小会議］

場面は［小会議］である。話し手[50代 ＊OD］の［多数］に対する発話であるから、性関係、年齢関係、付き合い年関係、親疎関係等すべて不明である。フォーマルな［会議］における丁寧度の低い「て」形式の使用は、発話者にとって場面は丁寧度を決定する要因とはなっていないことを示している。

2・3　「～てください」［打合せ］1例　［休憩時雑談］2例

(283) だから、さげないように、戻すように言っといてください。
［HI］［打］

場面は朝の［打合せ］、相手は［＊FK］だから性関係は［異性］、年齢関係は［上上］、職場関係は［同僚］、入社年関係は［先輩］、付き合い年関係は［2～4年］、接触量・会話量は［多多］、親疎関係は［親親］である。発話者［HI］は「～て」より丁寧度の高い形式を同僚である［＊FK］に対して使用している。［打合せ］というややフォーマリティの高い場面がこの形式を選択させている要因のようにも考えられるが、次の(85)の例の休憩時雑談における「～てください」形式の使用も［HI］によるものであるから、場面が丁寧度決定の要因となっているとは考えられない。また相手が異性かどうかという性関係も要因とは考えられない。この例においては、発話者

［HI］にとっての丁寧度を決める要因は、相手が先輩であること、年齢が上であること、即ち入社年関係や年齢関係にあると考えられる。

(85) 確認してください。［HI］［休］

発話者は［HI］、対する相手は［＊FK］である。場面は朝の［休憩時雑談］である。相手との性関係は［異性］、年齢関係は［上上］、職場関係は［同僚］、入社年関係は［先輩］、付き合い年関係は［２～４年］、接触量・会話量は［多多］、親疎関係は［親親］である。発話者［HI］の丁寧度を選択する要因は場面や性関係ではなく、年齢関係や入社年関係であると思われる。

(782) お顔をだしてください。［＊NE］［休］

場面は［休憩時雑談］である。話し手は30代の［＊NE］であり、相手は60代の元同僚の［＊ME］であるから、相手との性関係は［同性］、年齢関係は［上上］、職場関係は［元同僚］、入社年関係は［先輩］、付き合い年関係は［２～４年］、その他の関係は不明となっている。話し手にとって場面は休憩時雑談であっても、相手は自身よりずっと年齢も高い先輩であるから、「～て」よりレベルの高い「～てください」を使用したものと考えられる。この場合話し手にとっての丁寧度の要因は場面や性関係ではなく、相手との年齢関係や入社年関係によると思われる。

3 分　析

一般に「～てください」というレベルの依頼要求形式は［会議］等のフォーマルな場面に使われ、「動詞連用形＋な」「動詞基本形」「～なさい」「～て」という丁寧度の低い形式は［休憩時雑談］に用いられるように考えられる。つまりことばの丁寧度は場面に影響されると考えられがちである。しかし実例を観察すると、「動詞連用形＋な」「～なさい」「～て（ね）」や「～てください」は必ずしも場面別に使い分けられていない。「～て」だ

けは7例のうち6例が［休憩時雑談］に使われているが、「動詞連用形＋な」「～なさい」は［打合せ］の場面に使われているし、「～てください」は3例のうち2例が［休憩時雑談］に使用されている。日本語の話しことばにおいては場面は丁寧度を決定する要因として優先的ではないのである。

またその使い分けに性差があるかどうか。丁寧度の低い「動詞連用形＋な」「動詞基本形」「～なさいね」はすべて女性の使用である。「～て」は7例のうち男性が3例、女性が4例と使用率は男女ともあまり変わらないし、「～てください」は3例のうち2例が女性、1例が男性であり、これまた男女差はあまりない。但し「～てね」は女性のみで男性にはなかったところを見ると、まだ女性専用語としての勢力が強いようだ。しかし総じて依頼要求形式の丁寧度には発話者の性差は反映されてはいない。

実例を検討すると話しことばの丁寧度を決定する要因に話し手と相手との関係、即ち性関係、年齢関係、入社年関係、職場関係、接触量、会話量、親疎関係等が大きく関与していることが分かる。ではそのうちのどの関係が丁寧度に最も優先的に働くのか。

インフォマントである［HI］の発話をみると、「～なさい」はともかく、「～て」と「～てください」の使い分けになると微妙で、相手との関係をどのように見るかという発話者自身の意識によって丁寧度の要因が異なってくる。「～て（ね）」5例、「～てください」2例とも全て発話相手は［＊FK］である。［＊FK］に対して「～て」を使う時は、［＊FK］との間に距離を置かない密接な関係を保ちたいという意識が強く働いていると思われる。この場合の「～て」選択の要因には職場関係［同僚］、会話量や接触量［多多］、親疎関係［親親］が優先されている。また一方［＊FK］に対して「～てください」を使用する時には、先輩であり、年上である［＊FK］への敬意が強く意識されていると考えられる。この場合の「～てください」選択の要因には年齢関係［上］や入社年関係［先輩］が優先的に働いている。

では発話者が男性の場合、「～て」と「～てください」がどう使い分けられているか見てみる。発話者［＊FK］と［＊ME］の「～て」の使用は各1例

ずつあり、共に相手は［HI］である。［＊FK］にとって相手の［HI］は常時接している親しい同僚であるから、「～て」形式を使うことによって相手［HI］との間に距離を置かない親しさを表そうと意識する。この場合［＊FK］の［HI］に対する「～て」選択には接触量、会話量、親疎関係が意識されている。他方退職した［＊ME］にとって相手の［HI］は年齢ははるか下であり、もとより入社年関係は後輩であり、職場関係も元同僚である。接触量、会話量はそれほど多くなく、親疎関係も普通である。この場合［＊ME］の［HI］に対する「～て」選択には親疎関係や接触量ではなく、年齢関係や入社年関係、職場関係が意識されている。

発話者が30代の男性［＊NE］の「～てください」使用は1例ある。［休憩時雑談］の場面であっても、相手は60代の元同僚であり、年齢は倍以上も上の先輩であるから、話し手にとっては丁寧度の低い「～て」形式は使用しにくいだろう。「～てください」を選択した話し手［＊NE］の意識には当然相手との年齢、職場、入社年等の関係が働いていよう。

このように丁寧度には話し手と相手とのさまざまな関係が要因となっていても、その関係の優先順位には話し手の相手に対する心理的な意識の差が反映されているのである。

ところで、話しことばの丁寧度を決定する要因は以上の文レベルにおける分析だけでは不十分で、談話のレベルにおいて分析する必要がある。そこでインフォマント［HI］が同一の相手に対してことばをどのように使い分けているのかを、談話の流れの中で観察する。

まず教師［HI］が生徒［＊MY］に対して「動詞連用形＋な」、「動詞基本形」、「～なさいね」をどのように使い分けているのかを＜表2－1＞の朝の［打合せ］の談話で見る。

＜表２－１＞

(1)おはようございまーす。 [HI]
(2)ん [HI]
(3)はっきりいいな、あんた、はっきり。[HI]
(4)…… [*MY]
(5)はっきり、はっきり思っていることを言う。 [HI]
(6)出してなかった。 [*MY]
(7)出してなかったんでー？ [HI]
(8)今出しに来た。 [*MY]
(9)ん？ [HI]
(10)それで？ [HI]
(11)で、出しに来た。 [*MY]
(12)出しに来たんですかー。 [HI]
(13)昨日はどうしてだせなかったんですか？ [HI]
(14)と、昨日なんか、家に置いてあってなんか、やり方とかなんかあんまり覚えてなかったから。[*MY]
(18)うん。 [HI]
(19)要するにわすれちゃったわけでしょ？ [HI]
(20)あ、はい [*MY]
(21)じゃあ、なぜそれをその前に言わないの？ [HI]
(22)ん？ [HI]
(23)言ってから朝一番であんたなーければだめ [HI]
(24)言わないで、あんた一番なんでしょ？ [HI]
(25)はい。 [*MY]
(26)要領が悪いのよ。 [HI]
(27)そういうのって。 [HI]
(28)はあ。 [*MY]
(31)はい。 [HI]
(32)はあ。 [*MY]
(33)はい。（笑） [HI]
(34)思っていることね、ゆっくりでいいから、（間）はっきりと言いなさいね。 [HI]

提出物を忘れて、遅れて出しに来た生徒［＊MY］との対話である。はっきりとした物言いをしない［＊MY］に対して、教師［HI］は最初「はっきり言いな」という「動詞連用形＋な」の強い表現で相手の応答を強要している。それでもまだはっきり意志表明をしない［＊MY］に対して更に「はっきり言う。」と「言う」という箇所を強い口調で強調し、相手の回答を促している。動詞基本形「言う」は明示的な命令形式ではないが、強い態度や口調により文脈的に命令要求であることを示している。更に相手の応答を促していくうちに次第に相手に対して話し手の態度が軟化していっている。話し手の態度の軟化は「はっきりと言いなさいね」というやや丁寧な「～なさいね」形式によって表明されている。相手に対する話し手の態度がだんだん強から弱へと変化するにつれ相手に対する発話も丁寧度が高くなっている。つまり相手に対する話し手の態度が反映されているのである。

次に「～て」と「～てください」が談話の流れの中でどのように使い分けられているのかを＜表２－２＞の［HI］と［＊FK］の対話で見てみる。

＜表２－２＞

(42)△△先生、５千円崩れない？[*FK]
(44)５千円札う。[HI]
(45)昨日使っちゃったから。[HI]
(47)待ってー。[HI]
(48)待って、ここに２枚でしょ。[HI]
(49)へそくりのあるの忘れてた。[HI]
(53)いいねーえ。[*FK]
(54)要するにだらしないだけなんですけど[HI]
(57)どっかにあったのよ。[HI]
(60)…やっぱり、あのー、ねえ、…胃カメラ飲んで。[*FK]
(61)胃カメラ？[HI]
(62)それによって、（間）[HI]
(63)ちょっと待って。[HI]
(64)でも、ないのかな。[HI]
(67)あったー。[HI]
(68)４千円あるからー、足せば５千円札になる。[HI]
(69)交換して。[*FK]
(70)えー、でもセンセ５千円だとー、お昼ご飯食べれるじゃないですか[HI]
(71)いや、まだー。[*FK]
(72)あっ、あー[HI]
(73)ほら、４時間目授業あるから、金曜日は食いにいけなんだー。[*FK]
(74)あー、そうだよ。[HI]
(75)４、５、６、ってね。[*FK]
(76)待ってね。[HI]
(77)ここに１、２、３、４、（間）ここに。[HI]
(78)大きな財布だから財布のその中身いっぱい入ってそうねー。[*FK]
(79)んー、もう破れてんの。[HI]
(83)はい、じゃ、　５枚。[HI]
(84)はい、ありがとう。[*FK]
(85)確認してください。[HI]

同僚の親しい教師間の朝の私的な雑談である。「５千円崩れない？」という［＊FK］のざっくばらんな言い方に対して、［HI］は「待って（ね）」というくだけた「～て」形式で対応している。また［＊FK］も［HI］に対して「交換して」という「～て」形式で応じている。［HI］と［＊FK］はお互いに相手に対する親しい感情を、同レベルの「～て」形式を使用することによって表明している。「～て」使用は相手に対する親しい感情の表出である。しかしながら親しさの中にも礼儀ありで、［HI］は［＊FK］に対して「～てください」というやや丁寧度の高いレベルを使うことによって、先輩である［＊FK］に対する敬意を表明している。「～てください」は話し手の相手に対する態度の表出である。このように談話のレベルで依頼形式の使われ方を見ると、丁寧度の要因には相手に対する話し手の感情や態度が大きく反映していることが分かる。

4　おわりに

以上［HI］の資料を分析すると、(8)〜(13)のような丁寧度の高い間接依頼要求形式の使用は男女とも皆無である。また直接依頼要求形式における「〜なさい」、「〜て」、「〜てください」等の使い分けにも場面差や性差があまり見られない。学校という職場における話しことばには他の企業等の職場に見られる男女差や階級差等のことばの規制が極めて少ない。では「〜て」や「〜てください」を使い分ける要因は何か。本稿ではこの依頼要求形式の丁寧度の要因を話し手と相手との年齢関係、入社年関係、親疎関係、会話量、接触量とに求め、そのうちのどの要因が最優先されるかは、その話し手自身の発話相手に対する心理的な意識や態度・感情等によって左右されることを述べた。

【参考文献】

井出　祥子（1982）「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座５』大修館書店

遠藤　織枝他（1994）「共同研究・職場における女性の話しことば その２」『ことば』15号　現代日本語研究会

川成　美香（1992）「発話行為のタイプと丁寧度の男女差」『ことばのモザイク』目白言語学会

中島　悦子（1994）「発話の文末に現れる言語形式」『職場における女性の話しことば』　現代日本語研究会　財団法人東京女性財団1993年度助成研究報告書

水谷　信子（1985）『日英語　話しことばの文法』くろしお出版